

氏名	小関 孝子
学位の種類	博士(社会デザイン学)
報告番号	甲第360号
学位授与年月日	2013年9月30日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	「全国友の会」研究—『婦人之友』読者たちによる生活合理化とその 実践—
審査委員	(主査) 中村 陽一 笠原 清志(跡見学園女子大学マネジメント学部教授) 北山 晴一(立教大学名誉教授・大阪樟蔭女子大学大学院人 間学研究科教授) 天野 正子(東京家政学院女子大学学長)

I. 論文の構成と内容の要旨

1. 論文構成

論文題目：「全国友の会」研究

—『婦人之友』読者たちによる生活合理化とその実践—

本論文は、本文（序章、第一章から第六章まで）および付録資料、参考文献・参考史料、年表、謝辞を含む全203頁から構成される。

本論文の構成は下記のとおり。

序章 『婦人之友』愛読者組織「全国友の会」を研究するという事----- (1)

第一節 目的と意義 ----- (1)

1. はじめに —『婦人之友』愛読者組織「全国友の会」について … (1)

2. 「全国友の会」研究の目的 —生活合理化を分析軸として … (4)

3. 「全国友の会」研究の意義 … (5)

(1) 歴史研究としての意義 … (5)

(2) 組織研究としての意義 … (6)

第二節 本論文の研究範囲と先行研究

—創設者羽仁もと子および関連団体との関係を整理しながら----- (7)

1. 創設者羽仁もと子および「全国友の会」の関連団体 … (7)

(1) 創設者羽仁もと子と本論文の研究範囲 … (8)

(2) 株式会社婦人之友社と本論文の研究範囲 … (8)

(3) 学校法人自由学園と本論文の研究範囲 … (9)

2. 先行研究について … (10)

(1) 「全国友の会」に関する先行研究 … (10)

(2) 創設者羽仁もと子に関する先行研究 … (11)

(3) 『婦人之友』に関する先行研究 … (12)

(4) 生活合理化に関する先行研究 … (13)

第三節 構成と調査方法 ----- (13)

1. 全体の構成と分析視点 … (13)

2. 調査方法 … (16)

3. 史料について … (16)

第一章 明治・大正期の『婦人之友』から読みとる生活合理化への助走

—創設者羽仁もと子の思想形成プロセスをふまえて----- (18)

第一節 創設者羽仁もと子の思想形成 —「家庭」「生活」へのこだわり----- (18)

1. 羽仁もと子のおいたち ―思想に影響を与えた経験と出会い …	(18)
2. 夫・羽仁吉一の役割 ―夫として、編集者として、経営者として …	(21)
3. 羽仁もと子のキリスト教徒としての立ち位置 ―植村正久を師として …	(22)
4. 家庭雑誌『家庭之友』の創刊とその目的 …	(24)
5. 節のまとめ …	(27)
第二節 『婦人之友』の読者層：近代的家庭の形成を目指す知識階級の妻たち-----	(28)
1. 婦人雑誌『婦人之友』の創刊と婦人の啓蒙 …	(28)
2. 『婦人之友』の編集方針 ―羽仁吉一と石川武美の大衆化をめぐる議論から …	(29)
3. 大正期における政府主導の「生活改善運動」と民間メディアの役割 …	(30)
4. 自由学園の創立 ―「生活即教育」の具現化 …	(31)
5. 「全国友の会」の前身「婦人之友読者組合」の誕生 ―他誌の戦略と比較して …	(32)
(1) 羽仁もと子による「女学校同窓連合会」発足と失敗 …	(32)
(2) 『婦女界』と「愛読者修養会」 …	(34)
(3) 『主婦之友』と「文化事業部」 …	(34)
(4) 『婦人之友』と「婦人之友読者組合」 …	(35)
6. 節のまとめ …	(38)
第三節 関東大震災後の「生活を簡素に」という気運の高まり-----	(38)
1. 関東大震災と婦人雑誌 …	(39)
(1) 出版社の被災状況と関東大震災特集の比較 …	(39)
(2) 『婦人之友』1923年10月号における羽仁もと子の論調 …	(41)
2. 関東大震災罹災者支援活動と女性たち …	(43)
(1) 東京連合婦人会の成立とメアリー・ピアード …	(43)
(2) 主婦之友社の罹災者支援 …	(45)
(3) 羽仁もと子の罹災者支援 …	(46)
3. 婦人雑誌にみる「生活を簡素に」という気運の高まり …	(48)
4. 節のまとめ …	(49)
第四節 『羽仁もと子著作集』創刊による羽仁もと子思想の明文化-----	(50)
1. 『羽仁もと子著作集』創刊 …	(50)
2. 著作集創刊記念講演会を契機に、各地に友の会誕生 …	(51)
3. 「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」というモットーの確立 …	(53)
4. 「家庭は簡素に社会は豊富に」というヴィジョンの確立 …	(55)
5. 節のまとめ …	(57)
第五節 章のまとめ -----	(58)

第二章	戦前・戦中・戦後の「全国友の会」＜第Ⅰ期＞：1930-1954	
	—知識階級の妻たちによる啓蒙運動としての生活合理化-----	(59)
第一節	昭和初期の「合理化」という言葉の登場と背景-----	(59)
1.	語源の整理 —「生活」、「合理」、「合理化」…	(59)
2.	1930年に「合理化」が流行語となったのはなぜか	
	—「産業合理化」の派生語として登場した「生活合理化」…	(61)
3.	「合理化」を必要としていた昭和初期の暮らしの課題 …	(64)
4.	節のまとめ …	(66)
第二節	婦人による実践団体として始動した「全国友の会」-----	(66)
1.	「全国友の会」の創立 —各地友の会の連合組織として …	(66)
2.	「全国友の会」を特徴づけた創成期の議論 …	(70)
	(1) 「全国友の会」と宗教をめぐる会員間の議論 …	(70)
	(2) 「全国友の会」にみられる消費組合運動の影響 …	(73)
3.	「全国友の会」が実践団体となった契機 …	(73)
	(1) 「家庭生活合理化展覧会」の開催とそのインパクト …	(73)
	(2) 「東北農村生活合理化運動」と「農村友の会」 …	(76)
4.	「全国友の会」の会員獲得戦略と『婦人之友』の販売拡大戦略	
	—他の婦人雑誌の販売拡大戦略を比較して …	(79)
	(1) 『婦人之友』と「全国友の会」…	(79)
	(2) 『主婦之友』と「主婦之友愛読者会」…	(81)
	(3) 『婦人公論』と「愛読者グループ」…	(82)
5.	節のまとめ …	(83)
第三節	戦時体制下、貯蓄奨励の指導的立場に立った「全国友の会」-----	(83)
1.	日中戦争開戦を境にした論調の変化 …	(84)
2.	「全国友の会」の戦時中の主な活動 …	(85)
	(1) 一日一銭醸金という運動 —出征者家族支援として …	(85)
	(2) 貯蓄奨励のための家事家計指導「十人組」の結成 …	(87)
	(3) 他の婦人団体との関係と、活動内容の比較 …	(90)
3.	生活雑誌として生き延びた『婦人之友』 …	(91)
4.	節のまとめ …	(92)
第四節	戦後復興と農村生活の近代化を支援する「全国友の会」-----	(93)
1.	「全国友の会」の戦後の主な活動 …	(93)
	(1) 佐世保引揚者救援活動 …	(93)
	(2) 農村文化運動と農閑期衣食住学校 …	(95)
	(3) 「われらの衣食住展覧会」…	(96)

2.	戦後日本は羽仁もと子にどう映ったか ―羽仁説子との決別 …(97)	
3.	主婦之友社の戦後 …(99)	
4.	羽仁もと子の受勲 …(100)	
5.	節のまとめ …(100)	
第五節	章のまとめ-----	(101)
第三章	高度経済成長期の「全国友の会」＜第Ⅱ期＞：1955-1974	
	―専業主婦による暮らしのカイゼンとしての生活合理化 -----	(102)
第一節	高度経済成長という時代の新しい暮らし方 -----	(102)
1.	地方から都市へ：核家族化と専業主婦の時代 …(102)	
2.	暮らしの急激な変化 …(104)	
	(1) 「衣」の変化 …(104)	
	(2) 「食」の変化 …(105)	
	(3) 「住」の変化 …(107)	
3.	節のまとめ …(110)	
第二節	婦人雑誌業界の動向と『婦人之友』の立ち位置 -----	(111)
1.	戦後の四大婦人雑誌と新刊雑誌 …(111)	
2.	婦人雑誌業界のリーディングカンパニー主婦の友社の多角化戦略 …(113)	
3.	読者組織を復活させた『主婦の友』と『婦人公論』 …(114)	
	(1) 「主婦の友友の会」の活動 …(114)	
	(2) 「婦人公論愛読者グループ」の活動 …(114)	
4.	『暮らしの手帖』の商品テストが「全国友の会」に与えた影響 …(116)	
5.	節のまとめ …(118)	
第三節	戦後入会者が主役となった「全国友の会」 -----	(118)
1.	会員数の急増による、古い会員と新しい会員の二重構造 …(119)	
2.	技術で後輩を牽引した＜第Ⅱ期＞のリーダーたち …(120)	
3.	活動の全国統一化 …(122)	
	(1) 「全国一斉時間調べ」と「家庭生活展覧会」 …(122)	
	(2) 財団法人全国友の会振興財団の設立 …(123)	
	(3) 「家事家計講習会」の全国一斉開催 …(125)	
	(4) 「われらの公共費」―社会活動基金として …(125)	
	(5) 「生活即教育展覧会」 …(126)	
4.	節のまとめ …(126)	
第四節	「全国友の会」の暮しカイゼンサークル機能	
	―生活合理化のための家庭という現場における知恵と工夫 -----	(127)
1.	「カイゼン」とは何か …(127)	

2.	トヨタ生産方式の平準化に酷似しているYさんの掃除方法 …(128)	
3.	産業界のカイゼンを支えたQCサークル活動との類似点 …(132)	
4.	「全国友の会」の小集団、「最寄」について …(134)	
5.	節のまとめ …(137)	
第五節	章のまとめ-----	(137)
第四章	個人消費の時代の「全国友の会」＜第Ⅲ期＞：1975-1994	
	一時流とは無縁の、伝承の技としての生活合理化 -----	(139)
第一節	個人消費化の潮流に逆行する「全国友の会」 -----	(139)
1.	「わたしらしさ」を生活に求める時代の到来 …(139)	
2.	ファッション雑誌の台頭で苦戦を強いられる総合婦人雑誌 …(142)	
3.	個人消費化にブレーキをかける側に立つ「全国友の会」 …(143)	
	(1) 住の事例：二層式洗濯機と手洗いの推奨 …(144)	
	(2) 衣の事例：衣服の手づくりの推奨 …(145)	
4.	節のまとめ …(147)	
第二節	型紙化された「全国友の会」の生活合理化 -----	(148)
1.	家事家計講習会による入会者獲得 …(148)	
2.	転勤族妻たちのネットワークと主婦アイデンティティ形成の場 …(152)	
3.	型紙化された生活合理化 …(155)	
4.	節のまとめ …(155)	
第三節	「全国友の会」のバングラデシュ交流事業とその意義 -----	(155)
1.	バングラデシュ交流事業のきっかけ …(156)	
2.	ラジョール村での大豆料理の普及活動 …(157)	
3.	カティラ村でのパジャマ製作の指導 …(158)	
4.	社会活動へ使命感の維持 …(158)	
5.	節のまとめ …(159)	
第四節	章のまとめ-----	(160)
第五章	危機管理時代における「全国友の会」＜第Ⅳ期＞：1995-	
	一からだに染み付いた、生きるための基礎としての生活合理化 -----	(161)
第一節	現在の「全国友の会」—組織構造と活動内容-----	(162)
1.	友の会活動と職業の両立 …(162)	
2.	会員の高齢化がもたらしたもの …(164)	
3.	現在の定例活動 …(167)	
4.	節のまとめ …(171)	
第二節	危機管理時代における「生活合理化」の再評価 -----	(171)

1. 阪神・淡路大震災での被災者支援活動…(171)	
2. 阪神・淡路大震災で「全国友の会」が迅速に活動できた要因…(173)	
3. 東日本大震災での被災者支援活動…(176)	
4. 節のまとめ …(178)	
第三節 章のまとめ-----	(178)
第六章 「全国友の会」研究から何が見えたか -----	(180)
付録資料 -----	(184)
参考文献・参考史料-----	(189)
年表-----	(198)
謝辞-----	(203)

2. 論文の内容要旨

本論文は「全国友の会」の研究論文である。「全国友の会」とは、1930（昭和5）年に、羽仁もと子によって創設された婦人雑誌『婦人之友』の愛読者組織である。2013年3月現在、全国に約20,000人の会員がおり、国内外188の「友の会」によって構成されている。創立以来、任意団体という形態を維持し、会員は主婦を中心とした一般女性であり、活動資金は100%自己資金である。活動内容は、家庭を簡素にすることがより良い社会の形成につながるという信念のもとに、家事や家計の実践方法を講習会などを通じて広く社会に伝えようとするものであり、その方針は創立以来変わっていない。

本論文の目的は、第一に、日本近現代史における「全国友の会」の社会的役割の変容を明らかにすることである。そして第二に、その分析結果から「全国友の会」という組織の特性を明らかにすることである。これらを解明することによって、「全国友の会」の会員層であるアッパーミドル層の生活意識の変容をとらえることができるのではないかという仮説のもとに論証が開始されている。

筆者は、「全国友の会」と社会の距離を測るために、「全国友の会」の活動のキーワードである「生活合理化」という言葉を分析軸として用いている。生活合理化という言葉は、創立以来「全国友の会」の活動指針となっている言葉であるが、「全国友の会」は、時代とともにその言葉の解釈を変化させている。したがって、「全国友の会」がどのような文脈で「生活合理化」という言葉を用いているのかをとらえることによって、その時代の「全国友の会」会員の生活意識の変容をとらえることができると同時に、社会における「全国友の会」のポジションを確認することができる、という観点から分析がなされている。

序章では、時代ごとの分析に入る前に必要な情報として、現在の「全国友の会」の組織概要と、関連団体である婦人之友社、自由学園との関係を解説している。

第一章「明治・大正期の『婦人之友』から読みとる生活合理化への助走 ―創設者羽仁もと子の思想形成プロセスをふまえて」では、創設者羽仁もと子が生活合理化という思想にたどり着くまでの思想形成プロセスをふまえた上で、羽仁もと子が、夫・羽仁吉一と共に『婦人之友』を創刊し、意識的に知識階級の女性たちを読者対象に設定していたことを明らかにしている。さらに、「全国友の会」の前身組織である「婦人之友読者組合」を、他誌の読者組織と比較することで、羽仁もと子が目指したのは、知識階級の女性たちの組織化が目的であったことを示している。

また、筆者は、関東大震災がもたらした生活意識への影響に注目し、関東大震災後の「生活を簡素にする」という気運の高まりが、後に「生活合理化」という概念が拡大する布石となることを指摘している。加えて、羽仁もと子と自由学園の生徒たちは、関東大震災罹災者支援活動で、初めて実践的な社会活動に参加しており、自由学園の生徒たちが、後に「全国友の会」の会員となることから、関東大震災での罹災者支援活動が、現在の「全国友の会」の社会活動の原点であることを示している。

第二章「戦前・戦中・戦後の「全国友の会」〈第Ⅰ期〉：1930-1954 ―知識階級の妻たちによる啓蒙運動としての生活合理化」では、1930（昭和5）年に「全国友の会」が創立されてから、戦後の1954（昭和29）年までを対象としている。

筆者は、「全国友の会」が創立された1930（昭和5）年に、「生活合理化」という言葉が「産業合理化」の派生語として登場した経緯を、当時の新聞や雑誌記事の分析によって示している。「生活合理化」という概念の登場により、「全国友の会」は具体的な活動指針を手に入れ、「生活合理化」に基づいた家庭経営を伝える啓蒙運動を全国で展開した。戦時体制下においては、生活合理化は貯蓄奨励のための国策支援となり、終戦後は戦後復興のために目的はすり替わっている。つまり、目的が変化しながらも、「生活合理化」が啓蒙活動であるという点においては、戦前・戦中・戦後まで一貫しているのである。

第三章「高度経済成長期の「全国友の会」〈第Ⅱ期〉：1955-1974 ―専業主婦による暮らしのカイゼンとしての生活合理化」では、高度経済成長期の「全国友の会」について論じている。新しい時代に適応した暮らしのノウハウを学べる「全国友の会」は、戦後多くの新規入会者を獲得し、活動の中心は戦後入会者に移っていた。羽仁もと子亡き後、「全国友の会」では、卓越した家事技術を持った何人かの会員が、その技術力で新人会員を牽引するものの、リーダーシップは分散し、その一方で、活動内容については、全国統一化の傾向がみられる。

この時期の「全国友の会」は、現場主義による「カイゼン」で産業界を支えたQCサークル活動と多くの類似点を持っている。「全国友の会」には、家庭という家事の現場から発

信された暮らしのカイゼン策が、「最寄」とよばれる7~8人の小集団の機能を活かして、全国で共有されていく仕組みが出来上がっていたのである。

第四章「個人消費の時代の「全国友の会」〈第Ⅲ期〉：1975-1994 一時流とは無縁の、伝承の技としての生活合理化」では、1975年から1994年までの20年間を対象としている。この時期、「全国友の会」は、戦後教育を受けたニューファミリー層が組織の中核となっている。入会者・退会者が共に減少したために、会員が固定化されると同時に、生活合理化のための技術が体系化され、伝承されているのが、この時期の特徴である。

1970年代後半になると、日本の消費構造は、「モノ消費」から「意味消費」へと大きく変化し、「生活合理化」は時代遅れとなっていく。この時「全国友の会」は、意識的に時流に流されまいと、生活合理化の実践を堅持し、「意味消費」にブレーキをかける側に立っている。その結果、社会の潮流と乖離した独自の価値観で暮らす主婦同士のつながりは、会員間の仲間意識、つまりアイデンティティを強めることにつながり、「全国友の会」は、同質性を持った主婦の全国ネットワークという性格を強め、「転勤族」の妻たちの受け皿という社会的役割を担っていたのである。

第五章「危機管理時代における「全国友の会」〈第Ⅳ期〉：1995- 一からだに染み付いた、生きるための基礎としての生活合理化」では、現在の「全国友の会」について論じられている。現在の「全国友の会」を捉えるポイントは、組織の弱体化と「生活合理化」の再評価が同時におきているということである。「全国友の会」の組織の弱体化とは、入会者数の減少により、総会員数の減少傾向が続いていることと、会員の高齢化である。2013年3月現在、会員の半数以上が60歳代以上である。

そのような中、「全国友の会」会員たちの「生活合理化」が、危機管理の時代を生き抜くための生活術として、再評価されはじめる。会員たちは、「生活合理化」の実践を徹底的に繰り返してきた結果、「家庭を簡素にする」ための家事が、当たり前のことのようにからだに染み付いている。からだに染みついた家事技術は、災害事に生活の知恵として機能した。また、持ち物の数を少なく暮らすことや、エネルギー消費を抑える家事技術は、環境問題にさらされている現代社会に適した暮らし方として注目されているのである。

第六章は、まとめの章である。「生活合理化」という言葉を分析軸とし、「全国友の会」について通史的な分析を行ってきた結果、「全国友の会」の社会における役割が時代とともに変容していることが確認できた一方で、会員たちが「実践」している暮らし方自体は変容していなかったということが明らかになる。したがって、研究を通じて見えてきたことは、「全国友の会」の変容ではなく、私たちの日常がどれだけ急激に変化したのかという「近代化のダイナミズム」であった。

筆者は、現在「生活合理化」という暮らし方が再評価されているカラクリは、かつて当

たり前だった暮らし方に、希少価値が付加された結果であると分析している。会員たちは「家庭は簡素に社会は豊富に」というヴィジョンに支えられることによって、「家事」に社会的な意味付けを行い、共に実践する「仲間」と「場」を持つことによって、昔ながらの家事を現在に伝承してきたという指摘である。

さらに、消費の観点からは、「生活合理化」の再評価は社会が「モノ消費」への回帰を欲していることの表れであり、環境問題、エネルギー問題、災害対策、長引く不況、高齢化社会、といった多くの問題を抱える現代社会を生きぬくために、人々が「脱・意味消費」を模索しているのだと分析している。

以上のような分析から、筆者は、再評価すべきは、「生活合理化」ではなく、社会環境が変化しても生活合理化を伝承しつづけることができた、「全国友の会」が持つ伝承の仕組みである、と結論付けている。「全国友の会」の組織特性として見えてきた私的領域と公的領域の曖昧さや合議によって毎年リーダーを変えるとといった非合理性には、組織を常に有機体として維持する効果があるという考察を加え、「全国友の会」研究が示した結果は、長い間活動を継続してもシステム化されることなく「非合理性」を維持できる組織の在り方について、多くの示唆を与えていると締めくくっている。

II. 論文審査結果の概要

本論文は、知的好奇心を刺激する論文であると同時に、文体はきわめて平易であり、日常生活あるいはライフスタイルに関連する活動の紹介として適切な表現で記されている。

「全国友の会」を通史的に分析するために「生活合理化」という言葉をキー概念に用いたことはきわめて適切であり、妥当である。「生活合理化」というキー概念を用いたことにより、組織内の変容と、組織外すなわち日本社会の時代を同時にあぶりだすことに成功しており、論文にダイナミズムをもたらしている。

本論文の特徴としては、次の3点が挙げられる。第一の特徴は、「全国友の会」を包括的にとらえ、全体像を描くことに成功している点である。タイトルに焦点をあてて形容するならば、生活合理化の用語をキー概念としてまとめたひとつの近代史、いいかえれば生活思想史となっている。加えて女性による社会活動とその組織運営に関する社会史でもある。

第二の特徴は、論文にイデオロギー性を持たせないスタンスを保持することによって、史的事実あるいは社会的事象に必然的に含まれる両義性を見事に浮き上がらせている点である。いいかえれば、論文執筆に必要とされる批判的精神に貫かれた、優れた論文である。

第三の特徴は、マクロとミクロ（世俗間と認識論）の視点を有効に使用している点である。通時的な構成と記述および「全国友の会」を軸にしたことで、大きな流れを示すことができている。その一方では、細部の記述への配慮がなされており、文字化された資料と筆者自身が見聞して集めた資料によって、具体的な事例が、適切に示されている。例えば、

各地の友の会の事例として度々使用されている「町田友の会」に関する記述・紹介は実に説得的である。

これらの優れた特徴がある反面、本論文のマイナス点としては、次の2点を指摘せざるをえない。一点目は、第三章で「生活合理化」を「カイゼン」と表現している点である。「カイゼン」という用語は、友の会の用語ではなく、筆者が「似ている」と判断して状況証拠を集めて推論しているに過ぎない。にもかかわらず、あたかも「カイゼン」と捉えられていたことが事実であるかのような記述には、論理のすり替えが見られる。

二点目は、「家庭」や「家事」について論じているにも関わらず、「家族」および「家族関係」に関する記述がなされていない点である。家庭生活を合理化することが社会を豊かにするという考え方には論理飛躍があり、それを埋めるためにも、夫や子供を含む家族関係への言及は欠かすことができない視点であったはずである。この点については、筆者自身も課題として認識してはいるものの、残念な点である。

しかし、これらのマイナス点があるにも関わらず、総じて本論文の社会史、生活思想史、組織運動史における意義は高く、優れた論文として評価することができる。本論文は「全国友の会」を包括的に捉えた初めての研究論文であり、女性史および社会組織研究に一石を投じる可能性を持っている。

よって審査委員会はここに、本論文が博士（社会デザイン学）学位論文として相応しいものであることを、一致して承認することとする。